

エッセイ、1

提言「包囲された者たちの声」

(『詩人会議』2010年1月号30-32頁から転載)

長沢 栄治（東京大学名誉教授）

このエッセイは今から11年ほど前に書かれたのですが、これを読むと現今のパレスチナの状況が少しも改善していないことがよくわかります。7月号の長沢美沙子さんの「故郷喪失の半世紀と日本、ウラディミール・タマリ氏へのオマージュ」によれば、イスラエルによる弾圧、ガザへの大規模爆撃で明らかになった「アパルトヘイト体制」に対するパレスチナ人の抵抗は今なお激しく続いている。それに対して世界中の芸術家たちや学者たちが『アパルトヘイトに反対する書状』の署名運動を起こしていることを教えられました。このような深刻な現状をまえにすると、11年前に長沢栄治先生が書かれたこの提言「包囲された者たちの声」は、もう一度、私たちに呼びかける切実な声にもなるのです。（塩尻和子）

グローバル化などという言葉が流行り、モノやカネ、ヒトが世界中、自由に動き回るようになったと思い込んでいる私たち。世界中のニュースが絶え間なくテレビあるいはパソコンから、膨大な量で流れ出し、そうした情報の奔流の中に溺れそぞうだと感じている私たち。しかし、そんな私たちに届かない声は数多い。

ベイルートのサブラとシャティーラという難民キャンプで、一九八二年九月、数千人のパレスチナ人の老若男女が虐殺された事件は、世界に衝撃を与えた。しかし、それから四年後、同じキャンプが再び民兵組織に包囲されたとき、困窮する難民たちの声は世界に届かなかった。当時、現地で医療活動を続けていた外国人女性医師の記録を読むと、キャンプ内の小動物さえ食べつくすといった深刻な飢餓状況の中、テレビからは米国の大食い競争の番組が流れていたという話が出てくる（カッティング『パレスチナ難民の生と死』岩波書店）。包囲されている彼らの声は世界に届かないが、しかし、彼らの側からこちらの世界は見えている。貧困率の高さが公開され、年末には派遣村もできる「飽食列島」。そこで暮らす私たちの日常を、世界のどこからか、届かぬ声を持つ人たちが見つめている。それがグローバル化という時代に生きる私たちと世界との関係であるように思う。

彼らと私たちの間には、無関心という壁がある、あるいはメディアや専門家たちが作り上げた偏見の壁が立ちはだかっている。テロリストとその仲間と決め付けられることで、たちまち彼らは壁の後ろに隠れてしまう。ましてや、こうした壁に包囲された人たちの心情を理解することは、難しい。

一年前の二〇〇八年の年末から翌〇九年の一月にかけて、パレスチナのガザ地区をイスラエルが攻撃したとき、包囲された人たちの上げる苦しみの声は、少しでも私たちに聞こえたであろうか。しかし、まもなくそれは壁によって阻まれたであろうか。

最近、エジプト人の女性作家が書いた歴史小説『グラナダ』（英訳 Radwa Ashur, *Granada*, American Univ. Cairo Press）を読んだ。本を手に取ったとき、グラナダという書名から、繊細なイスラーム建築と涼やかで典雅な庭園を思い浮かべ、華麗な宮廷生活の話かと思った。しかし、登場するのはキリスト教徒軍に包囲され、追い詰められていくムスリムの一般市民の姿であった。イベリア半島最後のイスラーム王朝、グラナダ王国（ナスル朝）はカスティーリャ王国軍によって一四九二年に崩壊する。城を明け渡した王族は、市民を見捨てて、さっさとキリスト教に改宗して、貴族として迎えられる。その後に残されたムスリムの一般庶民を襲ったのは、伝統的な文化と宗教を、そしてそれに支えられた人間としての誇りを失っていく苦難であった。

クルアーン（コーラン）などアラビア語の本が没収され、広場で山と積まれて人々の面前で焚書される。公衆浴場（ハンマーム）が不衛生だとして使用を禁止され、男児の割礼も白眼視される。スペイン語とキリスト教への改宗を強制され、名前までも変えられていく。別の町で子供の頃に家族を殺され難民となってグラナダに来た青年は、こうした状況に対し、解放戦士となって、対岸のモロッコからのゲリラ攻撃に参加する。一方、キリスト教徒の支配下に安住する道を選んだ人たちは、ムスリムの解放戦士の武力闘争が自分たちの生活を脅かすと警戒する。

ここまで読んで来て、これがたんなる歴史小説ではないことが分かった。小説で描かれるグラナダの市民たちが、現在のパレスチナ人たちの姿に重ねあわされていることに思いいたったからである。私がそれに気づいたのは、作家の夫がパレスチナ人であることを知っていたためもある。しかし、そうではなくとも、分かる者には分かるものなのということではないか。少なくともパレスチナ人なら、この小説を読めばすぐにそれに気がつくはずだ。また逆に、包囲された人たちの心情を知らなければ、どのように感情移入をしたつもりでも、自分とは縁遠い昔の話以上の共感の深さを得ることはできないであろう。

誤解をされていないとは思うが、補足の説明を加えさせていただくと、パレスチナ人は、西岸地区に食い込んだイスラエルの分離壁や入植地の拡大という日常的な抑圧に遭いながらも、自分たちの文化や伝統は頑なに守っているし、またそれこそが抵抗の基盤だと考えている。また、これも言うまでもないことだが、現在のムスリムのアラブ人が五百年前のレコンキスタに恨みを抱き、スペインに復讐を誓っているなどということはない。今や、スペインには北アフリカからの労働移民が流入し、一方、南部のリゾート地はアラブの産油国のお得意様である。

しかしながら、この小説が描く「包囲された者たち」の世界が、占領下に暮らすパレスチナ人だけではなく、現在の世界のムスリムの人たちの心象風景を写しているのではないか、ということも付け加えて述べておきたい。外敵に包囲され、自分たちの大切な世界が

犯されているという危機感は、一種の強迫観念となって、少なからぬ数の世界のムスリムの行動に影響を与えてるのは確かだからだ。最近、ヨーロッパで起きるムスリムへの差別と偏見に由来する事件は、そのような「被包囲心理」をますます強めている（鈴木則夫『現代イスラーム現象』国際書院を参照）。そのような強迫観念それ自体は、過剰防衛的な反応ではないかという批判もあるだろうし、またこうした被害者意識が作り出す暴力行為（メディアではテロリズムと呼ばれる）そのものが正当化されて良いわけはない。しかし、こうした事件を利用して、イスラームとテロリズムを短絡的に結びつける偏見の壁を築こうという動きの方が、私たちにとってはるかに怖しい脅威なのだ。

人と人との間を隔てる壁を壊すためには、気の遠くなるような努力が必要であるし、またさらに壁を作りだすものは何かを考え、追求する努力も大事である。しかし、それより易しいようで実は難しいのは、まず包囲された人たちの声を聞きとることはないだろうか。私たちのごく身近にも多くの壁に隔てられ、包囲された人たちがいる。すべてが奪われていくような彼らの感覚や絶望の崖の淵を見下ろすようなその心情に思いを及ぼし、彼らの声を聞きとる力はどのように私たちに与えられるのか。この新しい一年を通して、それらについて学ぶものがいささかでもあればと考えている。